

〈報告・資料〉

授業の経験から考えた教科内容学

広島大学大学院教育学研究科 平 田 道 憲

キーワード：教科内容学，人間生活教育学，家庭科教育

〔要 旨〕

本稿では、教育学部における授業の経験から考えた教科内容学についての一考察を述べた。教育学部における教科内容学の授業と専門学部における教科の内容に関連する授業との違いについて焦点をあて考察した。専門学部における教科の内容に関連する授業は経済学の用語でいえば最終生産物にあたる。これに対して、教育学部における教科内容学の授業は「教える人に教える」というものであり、教員志望の学生にとっての原材料に相当する。教科内容学の授業では、その原材料から生み出すべき付加価値についてまで考えるべきである。教科内容学が目指すべき今後の方向として、第一に教科のなかの垣根を低くすること、第二に教科の垣根を低くすること、第三に学校教育の垣根を低くすることがある。

1. はじめに

2000年4月の広島大学教育学部の改組により、筆者の所属は人間生活教育学講座になった。人間生活教育とは教科を直接表す名称でないためその内容がわかりにくいかもしれない。教科の名称でいえば家庭科である。筆者の担当は家庭科のなかでは生活経営学あるいは家庭経営学の分野である。1992年4月に広島大学教育学部教科教育学科家政教育学講座（人間生活教育学講座の前身）に赴任した。自分自身が受けた大学教育および広島大学に赴任するまでに勤務した大学、短期大学での所属は教育学系ではなかったので、広島大学への赴任が教育学部との最初のかかわりであった。教科教育学や教科内容学についてもはじめてそういうことばを聞き、自分の講義（家庭管理学や生活設計論など）が広い意味での教科教育学のなかで教科内容学とよばれるものであることを知った。そこで、教科内容学とはどのようなものであるのか、担当する講義とかかわる範囲では自分なりに考えてみた。

今回、「21世紀の教科教育学の展望」について「教科内容学の研究の立場から考える」ということで、何人かの先生に話をうかがったり、これまでの教科内容学に関する論文なども読んでみた。論文としてまとめられたものとしては、家政教育学の内容学分野である食品学の視点から教科内容学について論じた佐藤一精の論文〔佐藤一精，1983，1986〕，広島大学教科教育学会において「教

科内容学の具体的構想」の課題研究を特集した紀要論文〔広島大学教科教育学会, 1987〕, 教科教育学の将来構想研究プロジェクトの研究報告書〔教科教育学の将来構想研究プロジェクト, 1997〕がある。しかしながら, こうした先行研究をふまえたうえで教科内容学について論ずるにはまだまだ勉強不足である。しかも, 教科内容学がかかえる問題は教科によってかなり異なる側面もあるようであり, 人間生活教育あるいは家政教育における経験を他の教科について一般化することは困難である。したがって, 本稿の内容は, 教科内容学の研究の立場からというような体系的・包括的なものでなく, 筆者の経験をとおしてとらえた教科内容学についての一考察と考えていただきたい。

2. 教科内容学の講義とはどういうものか

広島大学教育学部でのこれまでの経験や昨今の話題などから教科内容学に関する問題を整理すると次の三点にまとめられるのではないと思う。

第一は教科内容学という学問に関する議論である。教科内容学とはどのような学問であるかという問いに答えなければならない。

第二は大学院における教科内容学の研究に関する議論である。これは, もちろん教科内容学とは何かという第一の問題と関係するとともに, 大学院, とくに研究者養成を目的とする博士課程後期の教育と関連している。

第三は教育学部における教科内容学の授業と専門学部における教科の内容に関連する授業との違いについての議論である。これも, 理論的には第一の学問論と関係している。しかしながら, この議論は教育学部における教科内容学の説明責任, 英語というアカウンタビリティとも関係していて, 理論的というよりも多少政策的な意味合いも含んでいる。

この三つはどれも重要で難しい問題であることはいうまでもない。本稿では, 第三の点に焦点をあて, 筆者の経験をとおして考えたことについてまとめてみたい。第三の点について考えることは, 今後第一, 第二の点について考えるときにも意味があると思うからである。

広島大学には家政系学部がないので, 家庭科の場合は専門学部の授業との違いなどはあまり意識しないのではないかという意見もあると思う。教科によっては, 広島大学の理学部や文学部の授業との違いを明確にさせる必要が生じている。確かに広島大学のなかでみれば家庭科の場合, 専門学部の授業との重複は少ない。しかしながら, 教育学部における教科内容学という観点からすれば, 広島大学以外にも教員免許が取得できる家政系学部は数多くあるので, 教育学部に家庭科はいらないといわれないためにもよく考えておかなければならないと思う。

教育学部における教科内容学の授業と専門学部における教科の内容に関連する授業との違いについて考えるようになったのは, 家庭科の教科内容学はいかにあるべきかという疑問からきたわけではない。それは, 教育学部で授業をすることについて考えさせられたことからきている。教育学部の授業は「教える人に教える」というものである。実際には「教えることになる人に教える」なのであろう。教育学部出身の教官にとっては当たり前すぎることなのかもしれない。しかし, こ

のことに気づいたことは、筆者にとっては新鮮な驚きであった。教える内容は同じだとしても、それまで筆者が教えていた相手は教える人ではない。結果的に教員になる人はいるかもしれないけれども、教える人に教えているという意識はない。経済学のことでいえば、筆者の授業は最終生産物であったことになる。最終生産物というのは、再販売するために買われるのではないということにその特徴がある。たとえば、消費者が洋服屋で洋服を買うのはその洋服を売るためではなく自分で着るために買うので、この場合の洋服は最終生産物である。これに対し、洋服の例でいえば、洋服の原料である綿織物はそれを加工して洋服に仕立てて売る、つまり再販売するために買われるので、この場合の綿織物は最終生産物ではない。

教育学部の学生、厳密に言えば教員を志望している学生というのも、この綿織物を買う人と同じで学んだことを加工して小学校、中学校、高等学校の授業をすることになる。つまり、教科内容学で学んだ内容は自分が教えるための原材料になる。教える立場でいえば、教育学部にくるまでは洋服という最終生産物を売っていたのが、教育学部にきてからは綿織物という原材料を売ることになったようなものである。この「教える人に教える」という経験は、筆者にそれまで考えたことのなかったことを考えさせることになった。具体的な事例は教科によってかなり異なることと思う。筆者が担当している家庭経営学の例でいえば、その内容として生活時間研究の分野がある。教育学部でなければ、たとえば余暇時間が長いのは国民のどういう集団であるか、日本の夫の家事労働時間は国際的にみて長いのか短いかなどという研究成果を、理論的な背景をふまえたうえで教えれば一応終わりになる。ところが、家庭科教育では、「自由時間の有効な活用」について教えるというような内容がある。自分自身の自由時間の使い方をかえりみて、「自由時間の有効な活用」を教える能力がないことは自覚しているものの、だからといって何も教えないですましていいものかどうか。生活時間研究の内容を授業で教えるとき、教育学部に所属していなければまず教えようと考えないようなことをどうやって教えようか考える。こうした経験が教育学部で教えることの意味、たぶんその一部は教科内容学とは何かを考えさせてくれたのだと思う。

先ほどの経済学の用語でいえば、最終生産物は新たな経済価値を生み出さない。これに対して、綿織物を加工して洋服を生産した場合には、綿織物に新たな価値を生み出して洋服にする。この価値を付加価値とよぶ。教育学部の学生というのは、大学で習ったことに付加価値をつけて小、中、高校で教えることになるわけである。

もちろん、この付加価値というのは、教員になる学生がみずから考えて生み出すものである。しかしながら、教科内容学というのは、この付加価値のことまで考えて教えるところに存在意義があるのではないと思う。綿織物を売って、いい洋服をつくるのは洋服製造業者の責任だという考え方もある。専門学部で教科の内容を教えるというのはこの考え方に近いのではないか。どうすればいい洋服が作れるかということを考えて綿織物を売るという考え方もあると思う。教育学部の教科内容学というのはこちらの考え方になるのだと思う。

内容は専門の学部で教え付加価値は教義の教科教育学の学習と学生本人が考えるというよりもよいものを、教育学部の教科内容学が提供できるということを説明していくことが必要なのだと思う。

3. 教科内容学の今後の方向

では、教科の内容にどのような付加価値をつけたらいいのであろうか。これが教科内容学に与えられた課題である。明確な答えをもっているわけではないが、現在考えているのは次の三つの方向である。

第一は同じ教科のなかの垣根を低くすることである。教科内容学としてまず考えなければならないのは、教科の内容として何をどのように教えるかということであると思う。教材化の研究といってもいいかもしれない。そのためには、まず、同じ教科のなかでの内容学と内容学の垣根、内容学と狭義の教科教育学の垣根を低くすることが必要ではないか。自省をこめていえば、この垣根は思った以上に高いように思う。しかしながら、同じ教科のなかで内容学と内容学あるいは内容学と教科教育学が連携できなければ、教科内容学の発展も困難であると思う。

第二は教科の垣根を低くすることである。教育学部教科教育学科にきて驚いたことの一つは教科の強さである。教育学部にくるまでは、教科の枠などはできるだけ取り払うほうがいいのではないかと考えていた。しかしながら、教育学部にきて、教科の枠というものが政策的に重要なことは理解できるようになった。その内容なら理科や社会で教えるから家庭科はいらないといわれたいためには、家庭科という教科がどういうものであるかをたえず研究し、主張していかねばならない。しかし、教科内容学の発展のためには、やはり教科の垣根を低くする必要があるのではないか。しいていえば、教科にこだわりながら協力していくというような考え方ではないかと思う。学校教育のほうでは総合的な学習の時間が始まることになった。これなどは教科の垣根を低くするいい機会だと思う。

第三は学校教育の垣根を低くすることである。教科が学校教育と結びついた概念であることは明らかであるけれども、教員養成だけでない教科教育学、教科内容学を考えていくとすれば、学校教育から生涯教育へと対象を広げていかなければならないのではないか。このことは、教科によっても事情が違い、家庭科などはむしろ方向転換しやすいという面があるかもしれない。しかしながら、すべての教科内容学においても考えていくべき課題であると思う。

参考文献

- 佐藤一精 1983 教科教育学（家政教育学）と食品学，広島大学教育学部紀要 第2部 第31号
217-222ページ
- 佐藤一精 1986 家政科内容学の構想と食品学，広島大学教育学部紀要 第2部 第34号 197-202
ページ
- 広島大学教科教育学会 1987 教科教育学会紀要 第4号 課題研究：教科内容学の具体的構想
教科教育学の将来構想研究プロジェクト 1997 教科教育学の将来構想研究

[Abstract]

Research on Sciences Related to School Subjects Reflected in the Lectures

Michinori HIRATA

This paper examines the problems of research on sciences related to school subjects reflected in the author's experiences of giving lectures. The differences between lectures of research on sciences related to school subjects in the faculty of education and lectures given by professors in other faculties are discussed. Lectures in the faculty of education are given to students who want to be school teachers. When students become teachers, they will give lessons at school by processing what they learned in the faculty of education. They will add value to the lectures in the university. University teachers have to take the value added by students into consideration.